中等度認知症高齢者の更衣援助のための イネイブルメントの概念に基づく看護介入の検討

中筋 美子

要 旨

【目的】

本研究の目的は、「認知症高齢者の更衣援助のためのイネイブルメントの概念に基づく看護モデル」を用いて更衣援助を行い、その有効性を検討することである。この看護モデルは、Dawson et al. (1993) /山下 (2002) が提唱した「イネイブルメントの概念に基づく看護」をもとに作成した。このモデルは、認知症高齢者の更衣動作に関連するセルフケア能力・社交性能力・対人関係能力・認知機能のアセスメント項目と、能力を強化・代償するための看護介入で構成される。

【研究デザイン】

介入事例研究

【研究方法】

対象者は、介護老人保健施設またはグループホームに入所・入居している中等度認知症の女性高齢者5名である。 「認知症高齢者の更衣援助のためのイネイブルメントの概念に基づく看護モデル」を用いて、1週間、就寝前に更衣 援助を行った。更衣援助中の対象者の発言・表情・行動を記録したものをデータとして、質的帰納的に分析した。

【結果】

更衣場面では、セルフケア能力・社交性能力・対人関係能力・認知機能の4分野の残存能力が発揮された。また、 【認知症をもちながら暮らす経験】が語られ、【援助を受け入れて援助者に働きかける】【親密さをもって他者へかか わる】【自分を保っていようとする】という力が発揮されていたことが明らかになった。

【結論】

本研究により、セルフケア能力、社交性能力、対人関係能力、認知機能を念頭において、残存能力を強化し、失われた能力を代償する看護介入は、潜在する残存能力をより多様に引き出す可能性が示された。このことから、更衣援助を行う上で、本モデルは有効であったと考える。

キーワード:イネイブルメント、残存能力、認知症高齢者、看護介入、日常生活動作

I. 研究の背景

日本における認知症有病率は15%、有病者数は平成24 年時点で約439万人と推定されており1)、今後も認知症 者数は増加すると予測されている。認知症は「一度発達 した知的機能が、脳の器質的障害によって広汎に継続的 に低下した状態2)」である。認知症高齢者は、人が生 活するうえで基盤となる記憶、見当識、判断、思考等の 認知機能に障害を抱えているために、自立して日常生活 を営むことが困難となる。また、認知症の原因疾患の多 くは進行性であり、根治治療が困難なため、徐々に障害 は重度化していく。そのため、認知症高齢者は医療・介 護・福祉サービスを利用し、援助を受けることになる。 この時、もし援助に携わる者が本人の能力を過小評価し て、もしくは保護的になり過ぎて必要以上に援助してし まうと、その時まだ本人が持っている力を発揮する貴 重な機会を失うことになる。そのような状況が続いた場 合、認知症高齢者の力は衰え、身体機能が低下し、認知 機能障害までもが進行したように見えてしまうことがあ り、これはエクセス・ディサビリティ (excess disability) と言われている³⁾。

そこで、認知症高齢者がこのような状態へ陥ることを 防ぐために、「たとえその人が認知障害をもっていても、 日常生活を有意義に送ることができるように支える看護 の方法3)」として「イネイブルメントの概念に基づく 看護」が提唱されている³⁾。Dawson et al. (1993) / 山下(2002)は、看護者が認知症患者の残存能力を見極 め、その能力をさらに高めることができれば、患者はそ の能力を日常生活の中で発揮することができ、エクセス ・ディサビリティを防ぐことができると述べている³⁾。 このイネイブルメントの概念に基づく看護を展開する際 に用いられるツールが「残存能力測定尺度(Abilities Assessment Instrument;以下、AAIと記す)」であ る。AAIの評価項目は、認知症高齢者が日常生活を営む 上で不可欠とされるセルフケア能力、社交性能力、対人 関係能力、認知機能の4分野に大別され、各分野に含 まれる細やかな実行能力がその下位に置かれて構成され る。細やかな実行能力とは、生活上必要な諸行動に内在 し、その基盤となる力である。この生活上必要な行動、 つまり日常生活動作のアセスメント方法は、これまでも

開発されてきたが、従来用いられてきたアセスメント方法は、入浴や整容等の大きなカテゴリー毎に評価するため、評価結果と認知機能障害との関連を明らかにすることや、根拠ある具体的な介入方法を検討することは難しい。しかし、このAAIは認知症高齢者が日常生活を営む上で障害される細やかな実行能力に視点を置くため、介入を要する部分を細かく、具体的に把握できる。さらに、この看護モデルでは、AAIを用いて捉えた各能力の存在、喪失に応じてそれぞれ強化・代償するための効果的な看護介入法も提示されている。これは、生活上の諸行動に内在する能力に対応した介入であるため、様々な生活援助に適用することができる。

なお、様々な日常生活動作のうち、本研究では認知症 高齢者の更衣場面を取り上げて検証を行うこととする。 認知症高齢者は、病状の進行とともに季節や状況に合 う服が選べなくなるだけでなく、視覚認知や行為障害の 他、様々な神経所見を呈することもある²)ために、釣 り合いのとれた服を順序よく、かつ適切に着ることが困 難となる。それゆえ、援助が必要となるが、援助者が 自分の体に触れる意味や目的を認知症高齢者が理解でき ず、不安や恐怖を抱いた結果、拒否や抵抗を示し、更衣 動作の遂行が困難となることや、援助者にとって認知症 高齢者のケアに対する困難感を抱く経験となることもあ る。以上から、この看護モデルは様々な日常生活動作の 援助に適用できると考えられるが、そのなかでも更衣場 面を取りあげる意義が大きいと考え、更衣動作の援助に 適用して検証することとした。

Ⅱ. 研究目的

本研究の目的は、Dawson et al. (1993) /山下 (2002) の「イネイブルメントの概念に基づく看護³⁾」をもとに、研究者が作成した認知症高齢者の更衣動作に関連する残存能力のアセスメント項目と、各能力を強化・代償するための看護介入指針からなる「認知症高齢者の更衣援助のためのイネイブルメントの概念に基づく看護モデル」を用いて更衣援助を行い、その有効性を検討することである。

Ⅲ. 用語の定義

1. イネイブルメント

「できる能力に働きかける過程³⁾」と定義されている。能力の喪失ではなく、その人のできる力、持っている資源に焦点を当て、それを日常生活の中で最大限に発揮し、支障なく有意義な生活を維持できるように支えていくことをさす。

2. 残存能力

様々な能力を喪失していく中にあっても、本人が保持 している能力をさす。残存能力は、アセスメント項目の 質問やテストによって観察される言葉・行動と、援助場 面で観察される言葉・行動として表現される。

3. セルフケア能力

入浴、整容、着替え、その他安全に移動し活動する能力を含む基本的日常生活機能を実施するために必要な能力をさす。Dawson et al. (1993) /山下 (2002) は、セルフケア能力として、自発的動作・空間見当識・目的のある動作の能力に焦点を当てている。本研究におけるアセスメント項目には、これら3つの能力を取り入れた。

4. 社交性能力

社会的に認められている振る舞いであり、他者とやりとりしたり、様々な活動に参加したりするために使われる能力をさす。Dawson et al. (1993) /山下 (2002) は社交性能力として、社交的な働きかけ・会話能力・ユーモアの理解・音楽鑑賞の能力に焦点を当てている。このうち、本研究におけるアセスメント項目には「社交的な働きかけ」を取り入れた。

5. 対人関係能力

言語的・非言語的コミュニケーション能力をさす。 Dawson et al. (1993) /山下 (2002) は対人関係能力 として、言語的指示への理解・読解力・物の名称が言え ること・文章の完成 (言語の想起・選択)・話している 内容 (流暢に話す)・文章構成力という能力に焦点を当 てている。このうち、本研究におけるアセスメント項目 には「言語的指示への理解」を取り入れた。

6. 認知機能

人が外部からの刺激(人、物、出来事)に対して意味づけをする機能をさす。Dawson et al. (1993) /山下(2002) は認知機能として、自己と他者に対する理解・情緒の認識・感触による認識・時間の認知・想起・うれしいとか楽しい等の主観的感情を経験する能力に焦点を当てている。このうち、本研究でのアセスメント項目には「自己に対する理解」「時間の認知」「主観的感情を経験する能力」を取り入れた。

7. 強化する

保持された能力を継続して使えるようにすることを言う。日常生活の中でその力を使う機会をもつことをさす。

8. 代償する

生活を維持できるように失われた能力を補完すること を言う。生活に必要な諸行動が遂行できるよう支援を提 供する、そのために必要な環境を整備することをさす。

Ⅳ. 研究方法

1. 研究デザイン

介入事例研究

2. 研究対象者

介護老人保健施設、グループホームに入所・入居中の 高齢者で、以下の1) \sim 7) の基準に該当する者 5名を 研究対象者とした。

- 1)65歳以上
- 2) 今後2週間程度の入院・入所が予定されている
- 3) 認知症の診断を受けている
- 4) 中等度認知症と判定されている
- 5) 言語でのコミュニケーションが可能である
- 6) 認知症の影響のために、更衣に援助を必要として いる(運動機能障害のためだけに介助を要する者 は除く)
- 7) 本人、家族から研究参加に同意が得られる

3. 概念枠組

イネイブルメントの概念に基づく看護とは、認知症高

齢者の残存能力に働きかけ「日常生活を有意義に送ることができるように支える看護の方法(Dawson et al., 1993/山下, 2002, p.13)」である。このモデルは「イネイブルメント」「エクセス・ディサビリティ」「環境の圧力」の3つの概念に基づいている。そして、AAIと能力を強化・代償する看護介入方法で構成されている。AAIは、認知症により障害が生じる「セルフケア能力」「社交性能力」「対人関係能力」「認知機能」の4分野からなり、下位には生活を営む上で必要となる細かな能力(11カテゴリー)が含まれている。このAAIを用いて、細やかに能力の残存・喪失を捉えた結果を基に、能力が保持されている場合は強化するための介入、失われている場合は代償するための介入を行う。

このモデルを用いた先行研究には、Wells et al. (2000) が「残存能力に焦点を当てたケアプログラム」を基に職員教育を行い、Morning care (入浴、整容、更衣、排泄)を取り上げてプログラムの効果を示した報告がある。そこで、本研究では"Morning care"のうち更衣場面を取り上げて検証することとした。まずDawson et al. (1993) /山下 (2002) の「痴呆性高齢者の残存能力を高めるケア」を基に、「更衣に関する認知症高齢者の残存能力アセスメント項目と介入指針(以下、アセスメント項目と介入指針と記す;表1)」と「認知症高齢者の更衣援助のためのイネイブルメントの概念に基づく看護モデル(図1)」を作成した。このアセスメント項目と介入指針は、AAIの「セルフケア能力」「社交性能力」

「対人関係能力」「認知機能」の4分野の下位項目に示されている能力から、更衣援助に関連するものを抽出し、その能力毎に力を強化・代償する介入指針をまとめて作成した。

なお、更衣は日常生活のなかで起床時・衣類汚染時・ 入浴時・就寝時等様々な機会に行われる行為であり、場 面ごとに更衣援助の目標や留意点に異なる内容があると 考えられる。しかしながら、本研究の実施にあたり、介 入(更衣援助)を行うタイミングは研究協力施設との調 整が必要と思われたため、対象施設と相談して決定する こととした。相談の結果、更衣援助は就寝前に行うこと となった。

4. データ収集期間

2009年8月中旬~10月末

5. データ収集方法

データは、研究者が対象者へ就寝前の更衣援助を行い、 援助を通じて収集した。

1) 収集の手順

(1) 介入開始前

介入開始時点の研究対象者の状態を把握するため、 年齢、性別、入院・入所日、家族構成、居住形態(独居もしくは同居の別)、主病名(認知症の原因疾患名を含む)とその他の既往歴、要介護度、認知機能検査の結果、服薬内容について、経過記録から情報を収集

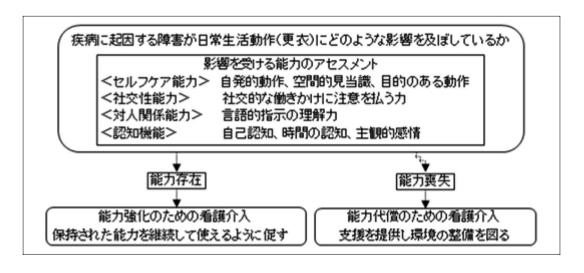


図1 認知症高齢者の更衣援助のためのイネイブルメントの概念に基づく看護モデル Dawson et al. (1993) /山下 (2002), 痴呆性高齢者の残存能力を高めるケアを基に研究者が加筆した

表1 更衣に関する認知症高齢者の残存能力アセスメント項目と介入指針

| アセス | メント項目 | 介入指針(強化) | 介入指針(代償) |
|---------|---------------------|---|--|
| セルフケア能力 | 自発的動作 | 普段のやり方で行う 筋力を保持するために受動的・能動的可 動域訓練を行う | 更衣の方法を変える ・腕、足の自発的動作が失われた場合 ベッドサイドに座ってもらい、重力を生 かして四肢を伸ばすことを助ける。四肢 が伸びるまで時間がかかることもあるの で少し待つ シャツやワンピースを着る場合は、立立位 で腕を伸ばしてもらう。役でとめるが望ましい ・把握反射が亢進している場合 一つ一の動作を行ういときに「指の力を 抜いてできるだけ指を下に向けてもらい、 指からシャツ、ワンピース、セーターや 上着に袖を通すようにする |
| | 空間的見当識 | 右、左という言葉をかける (例:「袖に右手を入れてください」) | 本人の注意を適当な部分に向けるときには、 言語以外の手段で伝達する (例:やさしく手をかける、身振りで示す) |
| | 目的のある動作 | 着替えに必要な衣類を用意する 動作の始まりを口頭で告げる (例:「今から着替えましょうか」) 必要に応じて模範的な動作を実際にやっ て見せる | 物品を見せ、手渡し、その物品の名前を言う 高齢者にやさしく触れ、適切な手順を導く 動作時に直接介助する 1つの動作から次の動作に移る能力が失われている場合には、次に移るよう口頭で 促す |
| 社交性能力 | 社交的な働きかけ に注意を払う力 | 接する度に、挨拶をする | 声をかけるときに、アイコンタクト、タッ チを使用する |
| 対人関係能力 | 言語的指示の理解力 | 患者の言語能力に応じた言葉の使い方を する 普通の速度、抑揚、声のトーンで話す 言語能力に応じて、抽象的な言い方と具 体的な言い方を使い分ける | はい・いいえの質問文と自由回答式質問を 用いる 非言語的やりとりを活用する その人独特な話し方やボディランゲージに 注目する |
| 認知機能 | 自 己 認 知 | 身だしなみを整えた後、鏡を用いて自分 (本人)についてポジティブに評価する 所有物や個人空間に名前を書く、貼る等 して、プライベートな空間を認知できる ようにする | 自室に鏡がある場合は、鏡にカバーをして 隠し、落ち着くことができる環境を整える |
| | 時間の認知 | 身近に時計を置く 時間をおり込んだ会話を取り入れる ベッドサイドにカレンダーを置く | 個々人の時間感覚を受け入れる |
| | 主 観 的 感 情 | ユーモアを導入する 感情を明確にし、評価する。また、心配 ごとに注意する | 信頼関係を築き、ケアリングの精神をもったコミュニケーションをとり、悲哀の感情を表出できるようにする |

Dawson et al. (1993) /山下 (2002), 痴呆性高齢者の残存能力を高めるケア³) を基に研究者が作成した

した。また、認知機能を把握するため、認知機能検査 Mini-Mental state examination (以下、MMSE)、N式 老年者用精神状態評価尺度(以下、NMスケール)を 行った。

(2) 介入開始後

- ●介入開始1日目に、AAIの項目を基に研究者が作成 した「更衣に関する認知症高齢者の残存能力アセス メント項目と介入指針(表1)」のアセスメント項 目に沿って、対象者の残存能力を1回査定した。
- ●アセスメント結果を基に、喪失した能力については能力代償の看護介入を、存在する能力については能力強化の看護介入を取り入れて介入計画を立てた。しかし、本研究で用いた看護モデルの核となる概念であるイネイブルメントに基づき、認知症高齢者が「日常生活を有意義に送ることができるように支える³)」ことを優先し、支障なく更衣動作を終了するために、もし援助の際、アセスメント時に「能力が存在している」と査定された能力が発揮されないようなことが生じた場合は、能力強化の看護介入を取り入れて援助することとした。立案した計画に沿って、介入を1週間行った。
- ●毎回、介入を始める前には、研究対象者の経過記録から、前日の介入後から当日の介入前までの心身の状態、言動の変化に関して情報を収集した。併せて、当日の担当スタッフへ研究対象者の心身の状態に変化がないか尋ね、状態を確認した。
- ◆介入を終えた後、担当スタッフへ更衣中の対象者の 様子について報告した。
- ●1回の介入を終える度に、介入中に観察した研究対象者の発言・表情・行動、研究者の発言・援助内容・考えたことをメモにとった。その後可能な限り速やかに、メモを参考にして場面を思い起こし、フィールドノートへ記録した。

6. データ分析方法

●対象者毎に、介入中や終了後に発した言葉・表情・振る舞い、研究者の発した言葉・援助内容・考えたことを記したフィールドノートを作成して、分析対象とした。

- ●まず、フィールドノートを基に、対象者の更衣動作を主な場面(更衣を始める場面、寝間着等の物品を準備する場面、普段着から寝間着へ更衣する場面の3場面)に区切り、各場面について、対象者が発した言葉・表情・振る舞いを「更衣に関する認知症高齢者の残存能力アセスメント項目(表1)」に照らして、セルフケア能力、社交性能力、対人関係能力、認知機能の4つに大別される残存能力が、どのように発揮されているかを検討した。
- ●次に、対象者にとって、このような援助を受けながら更衣することの意味を検討するために、対象者が発した言葉、表情、振る舞いを示すデータを眺め、「介入を行ったことによりどのような事象や力が明らかになったのか」との分析テーマをもって、質的帰納的に分析した。分析は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに準じて行った。まず、対象者から得られたデータを読み、テーマに関連していると思われる部分を取り出し、その意味を解釈して概念を生成した。そして、概念相互の関係を検討してカテゴリーを形成した。
- ●以上の過程においては、真実性・信憑性を高めるため、質的研究に精通し認知症看護を専門とする指導教員による定期的なスーパーバイズを受けた。

V. 倫理的配慮

本研究は、兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究 所研究倫理委員会の承認を得た上で、次の倫理的配慮を 行った。協力依頼の際は研究の趣旨・方法、及び参加は 自由意思である旨を文書と口頭で説明した。協力依頼の 際に用いる文書は、認知症と表記せず平易な文言で作成 し、説明の理解度や負担度を把握しつつ家族同席の場で 依頼し、本人・家族の同意・署名を得た。データは匿名 化して扱った。

Ⅵ. 結 果

1. 研究対象者の概要

対象者は女性5名、年齢は82~96歳であった。在所期間は2週間~2年3ヶ月、要介護度は3~4であった。

認知機能に関しては、MMSE $5 \sim 12$ 点/30点、NMスケール $17 \sim 25$ 点/50点(中等度認知症は $30 \sim 17$ 点とされる)で全員が中等度認知症であった。認知症の診断を受けた時期は $2 \sim 3$ 年前の者が2名、残りの者は明らかでなかった。

全員が認知症以外に身体疾患の既往をもち、さらにそのうち2名は精神疾患(A氏;不安障害、B氏;強迫性障害)の診断も受けていた。全員がこれらの既往疾患に対する薬物治療を継続して受けていた。また、B氏だけが認知症に対する薬物治療を受けていた。

身体機能に関しては、自立歩行ができる者はおらず、 全員が車椅子を使用していた。うち4名は何かにつか まる、もしくは他者が支えれば立位をとることができた が、1名は立位が全く不可能であった。表 2 に対象者の概要を示す。

2. 看護介入と対象者の反応の実際

「更衣に関する認知症高齢者の残存能力アセスメント項目(表1)」に沿って対象者の残存能力を査定し、能力が保持されている場合は強化するための介入指針、失われている場合は代償するための介入指針を用いて更衣援助を行った結果、更衣場面では4分野の能力が発揮され、それらが組み合わさって更衣が成り立っていることが確認された。表3に対象者の残存能力の査定結果、表4に更衣動作の実際と主に発揮された能力を示す。

表 2 対象者の概要

| | 施設種別 | 年齢 | 性別 | 要介護度 | MMSE | NM スケール | 在所期間 | 診断名 (診断年) | 移動 | 身体機能の特徴 |
|----|-------------|----|----|------|------|------------|-------|------------------------------|-----|--|
| A氏 | グループ ホーム | 89 | 女 | 3 | 12 | 25 | 2年3ヶ月 | 中等度認知症 *診断年・原因疾患不明 | 車イス | 両上肢: 挙上制限あり。MMT 4 下 肢: 膝関節の変形、屈曲・伸展制限あり。MMT 3 - 4 立 位: つかまり立ちは可能 歩 行: 手すり・補助具を使用すれば可能 (数mまで) 姿 勢: 円背あり |
| B氏 | 老健 | 82 | 女 | 3 | 11 | 23 | 1年7ヶ月 | アルツハイマー型 認知症 (X – 3 年) | 車イス | 下 肢: MMT 3 立 位: つかまり立ちは可能 歩 行: 手すりを使用すれば可能 (数歩まで) |
| С氏 | 老健 | 91 | 女 | 4 | 12 | 21 | 1ヶ月 | 老年期認知症。 多発性脳梗塞 *診断年不明 | 車イス | 両上肢: 挙上制限、肘関節屈曲・伸展制限 あり。MMT 3 手 指: 巧緻性が顕著に低下 下 肢: 両膝関節の変形、屈曲・伸展制限 あり。MMT 3 立 位: つかまり立ちは可能 (10秒強まで) 歩 行: 何かにつかまり、かつ他者の支え があれば可能 (すり足、数歩) 感覚器: 高度難聴、視力低下あり |
| D氏 | 老健 | 83 | 女 | 3 | 5 | 19 | 2 週間 | アルツハイマー型 認知症 (X — 2 年) | 車イス | 右上肢:挙上制限、肘関節屈曲・伸展制限 あり。MMT 3 左上肢:肩関節のみわずかに動かすことが できる 下 肢:随意運動はほぼ不可能。膝関節の 屈曲・伸展制限あり 立 位:不可能 姿 勢:円背あり 感覚器:軽度難聴あり |
| E氏 | 老健 | 96 | 女 | 4 | 9 | 17 | 5ヶ月 | 老年期認知症・ 多発性脳梗塞 *診断年不明 | 車イス | 立 位:つかまり立ちは可能 (数秒~10秒前後まで) 歩 行:不可能 姿 勢:円背あり |

表 3 更衣に関する認知症高齢者の残存能力アセスメント項目に基づく残存能力の査定結果

| アセスゝ | ソト項目 | A氏 | B氏 | C氏 | D氏 | E氏 |
|---------|---------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|----------------------------|
| | 自発的動作 | 左右とも腕・指 を随意に動かす ことが可能 | 左右とも腕・指 を随意に動かす ことが可能 | 左右とも腕・指 を随意に動かす ことが可能 | 左右とも腕・指 を随意に動かす ことが不可 | 左のみ腕・指を 随意に動かすこ とが可能 |
| セルフケア能力 | 空間的見当識 | 複雑な動作で 不可 | 簡単な動作のみ 可 | 右手のみ可 | 他者に対する動 作の一部のみ可 | 保持 |
| | 目的のある動作 | 保持 | 不可 | 不可 | 不可 | 不可 |
| 社交性能力 | 社交的な働きかけ に注意を払う力 | 保持 | 保持 | 保持 | 保持 | 保持 |
| 対人関係能力 | 言語的指示 の理解力 | 保持(1文に事 項2つまで) | 保持(1文に事 項1つまで) | 保持(1文に事 項1つまで) | ほぼ不可(首に 触るのみ可能) | 保持(1文に事 項2つまで) |
| | 自 己 認 知 | 保持 | 保持 | 保持 | 保持 | 保持 |
| 認知機能 | 時間の認知 | 不可 | 不可 | 不可 | 不可 | 不可 |
| | 主 観 的 感 情 | 一部保持 | 一部保持 | 一部保持 | 一部保持 | 不可 |

表 4 更衣動作の実際と主に発揮された能力

| 衣 4 | サ | - 10/202/J | 施日 (宮門美笠) * *##+ | z +8 -5 - | 並の美から寝門美々百木ナス相不 | |
|-----|---|--------------|--|--------------------------------|--|-------------------------------|
| \ | 更衣を始める場面 | | 物品(寝間着等)を準備する | 1 | 普段着から寝間着へ更衣する場面 | |
| | 動作の実際 | 発揮された 能 力 | 動作の実際 | 発揮された 能 力 | 動作の実際 | 発揮された |
| | 挨拶に対し「こんばんは」と返答 [毎日] | 社交性能力 | 「ちょっと着替えますんで、外出ててもらえますか?」等と言い、寝間着を取り出す[2、6日目]研究者がそばで見守ることを受け入れる[1、3日目] | 対 人 関 係 能 カ セルフケア 能 カ | 途中で手が止まる [4日目] ボタンを掛け違える [4日目] 見守りを断り、一人で着替え始め たが、途中でズボンが脱げなくな り、研究者へ助けを求める [6日 目] | セルフケカ 能 対 |
| А氏 | 体の調子を尋ねると「頭おかしなってきてるんです。何やよう分からんけど」と返答 [1日目] 「最近グロッキーやね」と返答 [5日目] | 能力 | 自分で寝間着を正しく準備する - [1、2、3、4、6、7日目] | 能力 | 「他の人のところ行ってください ね」と研究者の都合を配慮する [5日目] 「女の子やのにくろうなってしも うた」と研究者を心配する [1日 目] 「またお願いします」と次のこと を頼む [3日目] | 対 人 関 係能 力社交性能力 |
| | ほぼ同じ時刻になると自ら着替え 始める [2、4日目] 時刻を過ぎても始めようとせず、 促されてから着替え始める [1、 3、5、6、7日目] | 認知機能対人関係能 力 | 誤って普段着を準備する [5日目] | | | |
| В氏 | 挨拶に対し、「こんばんは」と返答[毎日] | 社交性能力 | 提示された寝間着を見て、「こんでもええよ」「うん」「こっちしよか」と同意を示す [1、6日目] 「もうちょっと薄いのないの?」「長いのない?」と別の物を要求する [2日目] 「これはあかん!」かたいんや」と却下する [4、6日目] 「どうかな?似おうとるかな?」と選ぶ「7日目 | 対 人 関 係 力 認 知 機 能 | 上着を広げてみて、前後・上下へと何度も回した後、手が止まる [4日目] 軽く上着をつまむ、上着を見せる 等の合図に応じ、1つずつ動作を始め、必要な動作を順序良く行う [1日目] 胸元で服が絡まる等途中でうまくいかなくなった時には「左…」「引っ張って一な」等と手伝いを求める [2、3日目]。ズボンをはくため一旦立ち上がった際に「立つんが厄介やな」と言う。[2日目] | セルフケ 能 人 関 力 能 |
| | 更衣の提案に対して「うん、ええ よ」「うん、簡単でええよ」と言 う [毎日] | | 乙茂の [/ 日日] | | 更衣後、「上等や」と言いながら 笑う。[2日目]「悪かったな。あんた手間とらしたやろ[2日目]」、 「来てな。また会おうな[4日目]」 と言う | 認知機能対人関係能力社交性能力 |

表 4 更衣動作の実際と主に発揮された能力 続き

| | 更衣を始める場面 | | 物品(寝間着等)を準備する | る場面 | 普段着から寝間着へ更衣する場面 | | |
|----|---|---------------------|--|--------------------|--|-------------------------|--|
| | 動作の実際 | 発揮された 能 力 | 動作の実際 | 発揮された 能 力 | 動作の実際 | 発揮された 能 力 | |
| С氏 | 挨拶に対し、「こんばんは」「あー来てくれたん」、「今日は来てくれへんのかな一思うとったんよ」等と言葉と表情で反応[毎日] | 社交性能力 | 提示された寝間着2組を見比べて選ぶ。[1、5日目]研究者が失敗した姿(誤って準備した半袖の寝間着を片づけている様子)を見て、「半袖はまだ早いね」と笑う[1日目] | 対 人 関 係 能 知 機 能 | 更衣開始の合図に応じて、自ら動き始める [1日目] じっと動かない [3、4日目] 動き始めたが、正しい動作でない [5日目] ズボンをはき替える際、研究者が足元を触っていると「足だいぶ腫れとう?」[1日目]、「なんや病気なりよんやろうか?」と尋ねる [5日目] | 能 力対人関係 | |
| | 更衣の提案を受けて「そうやね」 と返答 [1、3日目] 目を合わせる [2、4、5、6、 7日目] | 対人関係能力 | | | 更衣後、研究者に向かって「ありがとう、助けてもろうて」「また会いに来てね」等と挨拶、礼を述べる[2、3日目] | 対 人 関 係能 力社交性能力 | |
| D氏 | 挨拶を返し、「来てくれたんやー」 「うれしいわー」等と感情を表す 言葉を返す [毎日] | | 提示された寝間着を見て、「ええよ」「そうやね」「いいよー」等と返答する。[毎日] | 対 人 関 係 能 力 | 研究者がD氏の手の前に袖の入り口を構え、前腕に触れながら口頭で指示すると、「手入れる一」と言いながら、手を袖に入れ、関節を伸ばす。[2日目] 上着に頭を通した後、研究者が右手側へ服を引き、袖の入り口を広げて構えようとしていると、D氏は自ら右手を上向きに差し出す[5日目] | 能 力対人関係 | |
| | 更衣の提案を受けて、「うん」と 言う [1、4、5日目] 「ふふふ」と笑う [2、3日目] | 対人関係 力 | | | 更衣後、「きれいなったー [3日 目]」「気持ちええわー [5日目]」 等と感想を述べる | | |
| EĶ | 挨拶に対し「こんばんは」と返答 [毎日] | 社交性能力 | 提示された寝間着 2 組を見比べて、 「色同じのんでええよ [1 日目]」、 「こんな色もええね [4 日目]」 等と言い、1 つを選ぶ | 対人関係 力 | 更衣開始の合図に応じて、自ら動き始めたが、それに続く適当な動作は続けられず、手が止まる[1日目] 更衣後も、脱いだ衣類が見えると「それ着たらええね」等とさらに着替えようとする[5、6日目] 研究者がズボンの前後を確かめている姿を見て、「前後ろ分かった?」と言い、微笑みかける[2日目] | セルフケア 能 対 人 関 能 カ | |
| | 更衣の提案を受けて、 「そうやね」と一度で応じる [1、 4、5、6、7日目] 「いや車が来で帰ることになっとんです」等と一旦断る [2、3日目] | 対人関係 能 力 認知機能 | | | 更衣の途中・終了後に、「ありが とう「すいませんね」等と言う、 拝む、頭を下げる等で感謝を伝え る[毎日] | 社交性能力 | |

3. 看護介入を通して明らかになった事象と力

介入中や終了後に対象者が発した言葉、表情、振る舞 いを示すデータを、「看護介入を通して明らかになって きた事象や力 | を分析テーマとして分析した結果、22の 概念を生成した。さらに、概念相互の関係を検討したと ころ、6つのカテゴリーが形成され、そこから4つの大 カテゴリー【認知症をもちながら暮らす経験】【援助を 受け入れて援助者に働きかける】【自分を保っていよう とする】【親密さをもって他者へかかわる】が形成され た。【認知症をもちながら暮らす経験】はカテゴリー 《暮らし辛さや変調と共にある》で構成された。【援助 を受け入れて援助者に働きかける】は《他者を頼る》 《よい人間関係をもつ、保つために振る舞う》で構成さ れた。【自分を保っていようとする】はカテゴリー《「自 分らしい」を続ける》《今の自分とじっくり向かい合 う》と概念<自分に誇らしさや心地よさを感じる>で構 成された。【親密さをもって他者へかかわる】は、カテ ゴリー《人を思いやる》と概念<他者を求める気持ち、 好意を伝える>で構成された。(表5)【】は大カテゴ リー、《 》はカテゴリー、< >は概念、「 」は対象 者の発言として表現する。

1) 【認知症をもちながら暮らす経験】

対象者は、認知機能障害や加齢の影響を受けて《暮らし辛さや偏重と共にあ(る)》りながら暮らしていた。

対象者は、自分が思っているところと実際が違うように感じる等の<思った通りにうまくいかない>経験をしていることを、言動で表現していた。また、思うように袖から腕が抜けない(E氏)等うまくできなかったことや、体を動かしながら「こんでええ?」と一つ一つ確かめる(B氏)等、自分がしていることに自信が持てないこともあった。さらに、更衣に関することだけでなく、「おやつや言われて行っても出たことがない。よう分からん(A氏)」等日常生活の中で分からないことやうまくいかないことに直面していることも援助場面で語っていた。

また、「なんや病気なりよんやろうか?ふっと見たらえらい腫れとうなぁ思うて、怖なって(C氏)」等と語り、体に関心を持ち、心身の変調や今の状態を感じ取っていた。体だけでなく、認知機能障害による変調につい

ても「頭おかしなってきてるんです (A氏)」等と語り、 <心身の変調を感じ取る>経験をしていた。

以上のように、対象者は、暮らしの中でうまくいかない経験をし、思うように1人で動くことが困難であった。しかし、"座って大腿の上で服をたたむ (A氏)"、"いつも通りの位置にあるベッド柵をつかんで立ち座りする (B氏)"等、今の自分にできるやり方へ変えたり、自分にとって使いやすい物を使ったり、工夫して動こうと<暮らし辛くなった今の自分に合う工夫を取り入れ(る)>ていた。

2)【援助を受け入れて援助者に働きかける】

(1) 《他者を頼る》

更衣を行うため寝間着を手にとって「これはくんですか?」(A氏)、「もう寝てもええんやね? (C氏)」等と〈分からないことは他者に尋ね(る)〉たり、「こんでええ? (B氏)」「どないもないかな? (D氏)」と〈自信が持てないことは他者に確かめ(る)〉たり、立ち上がる際に支えて欲しいと手を伸ばす(B氏)等〈手伝って欲しいことを頼(む)〉んだり、「もうちょっと薄いのないの? (B氏)」等と自分の思うところや要求を伝えて〈る等〈交渉(する)〉したりしていた。

(2) 《よい対人関係をもつ、保つために振る舞う》

対象者は、〈恥じら(う)〉いの笑みを浮かべ、「ありがとう、助けてもろうて。上手言うとんと違うんよ(C氏)」と感謝や「あんた手間とらしたやろ。ごめんな(B氏)」とわびを表わし〈礼節を保(つ)〉っていた。また、言葉や表情で研究者を〈(他者を) 笑わせ(る)〉、更衣場面に楽しい雰囲気を作り出したり、「人のしんどいして、えらいなぁ(D氏)」などと〈他者をほめ(る)〉たりしていた。

3)【自分を保っていようとする】

(1) 《「自分らしい」を続ける》

対象者は、更衣する際に、自分らしい服の着方や選び 方を持っており、他者の助けを得ながら〈いつも通りの こと、好みを続け(る)〉、〈自分なりの対処法を実行 (する)〉し続けて、自分らしいあり方を実感していた ように思われた。

表5 看護介入を通して明らかになった事象と力のカテゴリー・概念一覧

| 大カテゴリー | カテゴリー | 概念 | 定義 | | | | |
|-----------------------|-----------------------------|---|---|--|--|--|--|
| | 暮らし辛さや変調と 共にある | 思った通りにうまくいかない | 暮らしの中で、思っていたところと実際が違っていたり、何か ちぐはぐなように感じたり、違和感を抱いたりする | | | | |
| 認知症をもちながら 暮らす経験 | | 心身の変調を感じ取る | 自分の心身の今の状態に関心を持っている そして、変調や今の状況を認識している | | | | |
| | | 暮らし辛くなった今の自分に合う工夫 を取り入れる | 自分の体が思うように動かなくなってきているが、今の自分かできるやり方へ変えたり、補うように工夫したりする | | | | |
| | | 分からないことは他者に尋ねる | 時間や日付、服の前後等、自分が分からない事柄を他者に ねる | | | | |
| | | 自信が持てないことは他者に確かめる | 自分がしている行動が適当か否かや安全・安心が得られるかと うかについて、他者へ確かめて保証を得ようとする | | | | |
| | 他者を頼る | 手伝って欲しいことを頼む | 自分では難儀してできそうにないが、他者に手伝って欲しい。 とを頼む | | | | |
| 援助を受け入れて援助者 に働きかける | | 自分の思うところや要求を伝える。相手からもメッセ 交渉する け取り、検討した上で反応する。納得できるところま 言い分も伝え、相手の言い分も聞く | | | | | |
| に関さかりる | よい対人関係を もつ、保つために 振る舞う | 恥らう | 恥らう気持ちをもち、他者から見た印象が悪くならないようし 振る舞いに気をつける | | | | |
| | | 礼節を保つ | 他者がしてくれたことに対する感謝やわびを言葉や振る舞い ⁻ 伝える | | | | |
| | | 他者を笑わせる | 笑わせるような言葉遣いや身振りで、他者の笑いを引き出す | | | | |
| | | 他者を褒める | 他者が自分にしてくれたことによって心地よさや有り難さを じ、その思いを直接相手へ伝える | | | | |
| | 「自分らしい」を続ける | いつも通りのこと、好みを続ける | いつも続けていることや好みが反映された自分なりの着方や! の選び方、物の使い方をもっており、それを実行し続けよう。 する | | | | |
| | | 自分なりの対処法を実行する | 自分の感覚を基に、これまでやってきた方法で自分なりに対 しようとする | | | | |
| | | 自分に誇らしさや心地よさを感じる | 家族や自分の身体、得意なこと等、自分が関わるものの中におしく、誇らしく、大切に感じているものがある。人からそを褒められたり、大切にしてもらったりするとうれしく、心はよく感じる | | | | |
| 自分を 保っていようとする | 今の自分と じっくり向かい合う | ありたい自分の姿と、今の自分を照ら し合わせる | 自分がこうありたいと望む像をもち、それに今の自分を照ら て思い巡らせる | | | | |
| | | 他者と今の自分を見比べる | 他者の状態を基準にして今の自分の状態を捉える | | | | |
| | | 他者から見た自分と、自分が思う自分 とを照らし合わせる | 他者から自分がどのように見られているかを意識している。 れに自分が捉えている自分を照らして思い巡らせる | | | | |
| | | 過去の自分へつながる | 過去の自分を想起して、その延長線上にいる今の自分と照ら て思い巡らせる | | | | |
| | | 自分らしい自分と、今の自分を照らし 合わせる | 各々が自分らしいと思う像をもっているそれに今の自分を照し、自分らしくいられないことやどうあり続けるかについて! い巡らせる | | | | |
| | 1 た田い 5 7 | 他者を思いやる | 目の前にいる他者の身や心情に気を配る | | | | |
| 親密さをもって 他者へかかわる | 人を思いやる | 目の前にいない家族を思いやる | 今はそばにいない、自分の家族を思い浮かべ、その心身に気 配る | | | | |
| | | 他者を求める気持ち、好意を伝える | 他者へ関心を示したり、言葉で次の訪問を求めたり、自分が いている好意を言葉や身振りで伝えたりする | | | | |

また、対象者は家族や自分の体の一部、得意なこと 等、各々に大切にしているものや愛おしいと感じるもの をもっていた。それを褒められたり、大切にされたりす ることを通して、〈自分に誇らしさや心地よさを感じ (る)〉ていることが表現されていた。

(2) 《今の自分とじっくり向かい合う》

対象者は、「もうちょっとなんやけどね。なかなか。 シャシャーっと歩けるようになりたい(A氏) | 等と 〈ありたい自分の姿と、今の自分を照らし合わせ(る)〉 たり、杖をついて歩く他者の姿を見ながら「あの人よう なったね」(A氏) 等と〈他者と今の自分を見比べ(る)〉 たり、「ええ加減や思う、自分では。ええ加減な人や思 うとった (D氏)」等と〈他者から見た自分と、自分 が思う自分とを照らし合わせ(る)〉たりしていた。ま た、「何のばちでこないさせられとんやろ… (D氏) | 等と〈過去の自分へつながる〉ように語り、「若い人 はハイカラな言葉つこうてるけど、そんなん分からへ んし…『もうええわ』思うてそのままつこうとる(C 氏)」等と〈自分らしい自分と、今の自分を照らし合わ せ(る)〉ていた。このように、今の自分を見つめ、そ れと過去の自分や他者、他者から見られた自分、自分が ありたい姿と照らし合わせ、思い巡らせていた。

4)【親密さをもって他者へかかわる】

(1) 《人を思いやる》

対象者は、更衣中の関係をよくするためだけではなく、「遅うなったらあんたあかんやん(B氏)」と研究者の身や都合を案じたり、他の入居者の心情を察して声をかけたりして〈他者を思いやる〉振る舞いを見せていた。そして、「こんなんやけど頼むわね(C氏)」等と〈他者を求める気持ち、好意を伝え(る)〉て、研究者へ関心を示し、次の訪問を求めてより深く、親密に関わろうとしていた。また、「お父さん、一人でしとうと思うんやけどね」と家族の食事を気にかける(E氏)等〈目の前にいない家族を思いや(る)〉っていた。

Ⅷ. 考察

本研究により、セルフケア能力、社交性能力、対人関 係能力、認知機能を念頭に置いた上で、残存能力を捉え て強化し、失われた能力を代償する看護介入によって、 認知症高齢者が4分野の残存能力を発揮しながら更衣を 完遂できることが示された。また、アセスメント時はで きなかったこと、つまり能力を喪失していると査定され たことが、介入時にはできた日もあった。例えば、適当 な動作を順序良く続ける能力が喪失していると査定され たB氏、C氏、D氏では、"指示する前に次の動作を予測 して腕を伸ばしてくる (C氏、D氏)"、"足を上げる (B 氏)"という流れに沿って次を予測した行動や、自分で 「いーち、にー」と拍子をとって立ち上がろうとする (C氏) 行動等が見られた。このような行動は、動作 を順序良く行う能力の存在を窺わせるものである。現在 は、アセスメント時の状態が、本来できる能力が使われ ないために疾病そのものの影響以上に低下している状態 かどうか、つまりエクセス・ディサビリティについて確 かめる方法は確立されていない。それゆえ、このよう な行動が、本来のレベル通りに発揮されたことを示すの か、関連する他の力が強化されたことによって二次的に 力がより引き出されたことを示すのかを判断することは 難しい。しかし、認知症には進行性の原因疾患が多く、 数か月、年単位の経過のなかで、様々な能力を喪失して いくということ、その時点で残存している能力であっ ても、援助者のかかわり方を含む環境の影響を受けるた め、残存能力を発揮できるかどうか、必要とする場面で 十分に発揮されるかどうかは一様でないという特徴があ る。それゆえ、認知症高齢者の看護において、日常生活 動作の1場面、1回ごとに、その時点で残存している能 力を発揮されること自体が意義深く、本研究の結果は更 衣援助において一定の有効性を示唆するものと考える。

また、本研究では、残存能力の捉え方と実際の援助場面へ適用する際に留意すべきことも明らかとなった。本研究では、セルフケア能力のアセスメント項目に、自発的動作、空間見当識、目的のある動作の能力を取り入れた。このうち、目的のある動作の能力は、アセスメント通りに毎日発揮されていなかった。アセスメント時には、目的のある動作の能力が存在していると査定されたA氏

には、ほぼ同じ時刻になると自ら着替え始める日と時刻 を過ぎても始めようとせず、促されてから着替え始める 日、自分で正しく寝間着を準備する日と誤って普段着を 準備する日があった。また、B氏にも同様の場面が認め られた。B氏は、アセスメント時には、目的のある動作 の能力は喪失していると査定されたが、目的のある動作 の能力のうち、服の前後を正しく判断することだけはで きていた。しかし、その後、服の前後を判断できない日 があった。このように、アセスメント通りの残存能力が 発揮されていなかった日は、いつもと同じような場面で あっても対象者の反応が異なり、「気がうろうろする」 「なるようになるな?」等と自らの不穏な感覚が表現さ れている、心配な事柄について語っている等の言動が認 められていた。こういった言動は、残存能力がアセスメ ント通りに発揮された日には認められなかった。このこ とから、心理状態が残存能力の発揮に影響を及ぼしてい たと考えられる。本研究で用いた看護モデルには「環境 の圧力」という概念が取り入れられており、認知症高齢 者は、残っている能力に対して環境から受ける刺激が過 大な場合、刺激に対処できず、イライラやひきこもり を引き起こしてしまう3)と言われている。これによる と、先述した不穏な感覚や心配の表明から、対象者に とって環境から受ける刺激が過負荷となっていた状況が 推測される。以上から、アセスメント項目を用いて認 知症高齢者の残存能力を捉えた結果は、ある時点におけ る、環境や疾患の影響を受けた認知症高齢者の残存能力 総体の一部分を示しているに過ぎないと言える。それゆ え、実際の看護援助へ適用する際は、アセスメントで捉 えたものだけでなく他の能力が存在する可能性を念頭に 置く必要性がある。つまり、認知症高齢者の残存能力を 捉えるためには、アセスメントツール等を用いて目に見 えない総体の一部分を定点で捉える方法と、そこで捉え た残存能力を強化・代償していく中で表現される言動か ら、潜在する他の力の存在を見出しさらに働きかけてい くという、循環するプロセスの中で捉える方法の双方が 必要と言える。また、本研究で用いた看護モデルでは、 認知症高齢者を取り巻く環境がアセスメント結果に及ぼ す影響については言及されていないが、実際の援助場面 でこの看護モデルを適用し、もし援助中にアセスメント 通りに能力が発揮されない状況が生じた場合には、環境

の影響を鑑み、過大な刺激をそれ以上に受けることを避けるために、発揮されない能力を補うように介入を調整する必要があると考える。

さらに、更衣場面では、セルフケア能力・社交性能 力・対人関係能力・認知機能の4分野の力が、アセスメ ント項目で捉えたものだけでなく、多様に発揮されてい た。その一例には、援助者とよい関係をもつための振る 舞いや、自分が大事に思うものを人から大切にされたり 褒められたりすることで誇らしさを感じること、自分 らしい服の着方や選び方を持っていること等が挙げられ る。こうした言動には、各人の個性や人間らしさが表れ ていた。さらに、人と深くかかわることや自分らしいと ころを大切にされること、自分らしいところを持ち続け ること等に対する欲求へつながっているようにも推察 された。そこで、更衣行動や明らかになった言動をマズ ローの欲求階層説5)に基づいて検討したところ、更 衣は安全の欲求に属するが、援助場面で表現された言動 は、所属と愛、承認、自己実現の欲求という上位の欲求 につながるものと考えられた。認知症高齢者は、疾患 の影響により、安全の欲求を満たすために行動すること や、病状が進行すると言語や振る舞いによって適確に意 思を表現することが困難となる。自分自身でより上位の 欲求を満たすことも難しくなるため、援助者が本研究で 見出されたような言動や力に注目し、それらによって 表現された内容を捉えることは、認知症高齢者が人らし く、いきいきと暮らせるように支援する上で重要である。 本研究の結果から、残存能力を捉え、日常生活の中で発 揮できるような援助から、各人の個性や人間らしさの 表現を豊かに引き出す援助を開発できる可能性が示唆さ れ、今後検証を重ねる必要があると考える。

Ⅷ. 研究の限界と今後の課題

本研究は、対象が女性5名と少数かつ性別に偏りがあること、対象施設が限られていること、認知症の重症度を中等度に限っていることから、一般化には限界がある。今後は男性や中等度以外の認知症高齢者へと対象を変え、検証を行う必要がある。また、本研究では日常生活動作から更衣を取り上げたが、他の行動への適用について検討が必要である。最後に、研究者自身の限界とし

て研究や認知症高齢者への看護に関する未熟さが挙げられる。研究、認知症看護の専門家によるスーパーバイズを受けて研究を進めたが、対象者の理解や介入、データ収集の質が十分なものとは言えないこと、その分析も読み取った意味に誤りや不十分さがあることは否めないと考える。

区. 結論

本研究は、研究者がAAIを基に作成した「更衣に関する認知症高齢者の残存能力アセスメント項目」と残存能力を強化・代償する看護介入からなる「認知症高齢者の更衣援助のためのイネイブルメントの概念に基づく看護モデル」を用いて実際に更衣援助を行い、その有効性を検討することを目的とした。セルフケア能力、社交性能力、対人関係能力、認知機能の4つに大別される残存能力をアセスメントし、更衣援助を行った結果、以下のような結論を得た。

1. 対象者はセルフケア能力・社交性能力・対人関係能力・認知機能の4分野の残存能力を発揮し、失われていた能力は介入で補われることによって、更衣が完遂された。この過程から、認知症高齢者が援助を受けながら更衣するためには4分野の能力が必要であり、それらが組み合わさって成立しているということが明らかになった。

- 2. 援助場面では、アセスメント項目で取り上げた以外 にも4分野の残存能力が発揮され、多様な言動として 表現された。
- 3. 残存能力によって表現された言動を質的帰納的に分析したところ、暮らし辛さと共にあるという【認知症をもちながら暮らす経験】が明らかになった。併せて、他者を頼ったりよい対人関係を保とうと振る舞ったりする【援助を受け入れて援助者に働きかける】、思いやったり好意を伝えたりする【親密さをもって他者へかかわる】、自分らしいことを続けたり自分を見つめたりする【自分を保っていようとする】という力が発揮されていたことが明らかになった。

以上のように、残存能力を捉えて介入したことによって能力を活用しながら更衣が完遂できたこと、さらにアセスメント項目で捉えたもの以外にも残存能力が引き出されたことから、更衣援助を行う上でこのモデルは有効であったと考える。

X. 謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただいた研究協力者の皆様、研究協力施設の皆様に感謝申し上げます。なお、本研究は、2009年度兵庫県立大学大学院看護学研究科修士論文に一部加筆・修正したものであり、2010年日本老年看護学会第15回学術集会にて発表を行った。

引 用 文 献

- 1) 朝田隆ら、都市部における認知症有病率と認知症の生活機能障害への対応、厚生労働科学研究費補助金認知症対策総合研究事業平成23~24年度総合研究報告書、2013、
- 2) 博野信次. 臨床認知症学入門 正しい診療・正しいリハビリテーションとケア. 京都, 金芳堂, 2007.
- 3) Dawson P., Wells D. L. & Kline K. 痴呆性高齢者の残存能力を高めるケア. 山下美根子監訳. 東京, 医学書院, 1993/2002.
- 4) Wells D. L., Dawson P., Sidani S., Craig D. & Pringle D. Effects of an abilities-focused program of morning care on residents who have dementia and on caregivers. Journal of the American Geriatrics Society, 48(4), 2000, 442-449.
- 5) Maslow A. H. 人間性の心理学. 小口忠彦訳. 東京, 産能大学出版部. 1970/1987.

Nursing Care to Enable Dressing for Elderly People with Middle-stage Dementia

NAKASUJI Yoshiko

Abstract

[Purpose]

This study aimed to provide dressing assistance following a nursing model based on the concept of enablement for dressing assistance for elderly people with dementia, and examine the model's efficacy. This model was based on "Enablement Nursing Process" (Dawson et al., 1993; Yamashita, 2002). This model consists of assessment items for self-care, social, interactional, and interpretive abilities relating to dressing in elderly people with dementia as well as nursing intervention for enhancing and compensating their abilities.

[Design]

Intervention case studies

[Methods]

Dressing assistance was provided over one week before bedtime, employing this model. The participants were five elderly women with middle-stage dementia who were admitted to or resided in geriatric health services facilities or nursing homes. Utterances, expressions, and actions during dressing assistance were recorded and used as data, which were later analyzed qualitatively and inductively.

[Results]

In clothing-change situations, retained abilities were exhibited in the fields of self-care, social, interactional and, interpretive abilities. Furthermore, the *experience of living with dementia* appeared as a spoken topic while abilities such as accepting assistance and increasing the assistants' workload, interacting with others with intimacy, and attempting to hold on to oneself were exhibited.

[Conclusion]

With regard to self-care, interactional and, interpretive abilities, this study suggested that nursing assistance that enhances retained ability and compensates for lost abilities extracts latent retained ability more diversely. These findings lead to the conclusion that the studied model was effective in providing dressing assistance.

Key words: enablement; retained abilities; elderly people with dementia; nursing care; activities of daily living